

# 保育所等における子育て支援をよりよくするための連携と協働の方法に関する研究 —ICT の活用状況に着目して—

|         |        |                   |
|---------|--------|-------------------|
| 〈研究代表者〉 | 平山 猛   | （認定こども園さざなみ保育園園長） |
| 〈共同研究者〉 | 岩橋 道世  | （こども園るんびにい副園長）    |
|         | 青木 恵里佳 | （子供の家愛育保育園副園長）    |
|         | 齊藤 奈緒美 | （本荘中央こども園副園長）     |
|         | 只野 裕子  | （こども園あおもりよつば園長）   |
|         | 福澤 紀子  | （こども園つるた乳幼児園園長）   |
|         | 永田 久史  | （第2聖心保育園園長）       |
|         | 田和 由里子 | （春日こども園園長）        |
|         | 筒井 桂香  | （もとしろ認定こども園園長）    |
|         | 飯盛 裕介  | （日新こども園副園長）       |
|         | 菊池 渉   | （堺いずみ保育園園長）       |
|         | 原 小百合  | （つばめこども園主幹保育教諭）   |
|         | 田口 侑平  | （和田愛児園副園長）        |
|         | 坂崎 隆浩  | （こども園ひがしどおり理事長）   |
|         | 北野 幸子  | （神戸大学大学院教授）       |
|         | 矢藤 誠慈郎 | （和洋女子大学教授）        |

## 研究の概要

本研究では、保育者が保護者等に伝える伝達内容について、口頭、紙媒体、ICTの3種類の伝達手段を想定し、連絡帳やおたよりといった伝達方法によってどのように行われているかを明らかにし、それぞれの利点や弱点について把握して、今後のよりよい伝達方法について探ることを目的として、実際の保育現場においてどのような実態があるのか検証した。

保育者は複数の伝達内容について発信し、複数の伝達手段を用いる。口頭、紙、ICTそれぞれの活用を進める一方、どれか1つに限定せず複合した利用が見受けられた。伝達方法については、伝える相手である保護者との関係や個性によって使い分けをしたり補足したりしている。また、伝達手段の選択は、情報の内容、保護者の状況、業務効率に影響を受けている。

伝達における利点・弱点の傾向には、業務省力や経費削減といった効率性や情報伝達の容易性、そして理解や認識の共有が保育者と保護者とで齟齬が生じないかという正確性の3つに分けられる。発信者である保育者にとって、これら利点と弱点を制御し、より利点を伸ばし弱点を補うといった工夫が施されていることが明らかになった。

保育者と保護者の伝達を通じた関係は、両者をつなぐ伝達手段・方法は保育者のスキル・技術と保護者の受入体制に影響を受ける。このような関係を通じて両者の相互作用が促され、関係構築が進んでいくものと捉えることができる。

キーワード：伝達手段、伝達内容、伝達方法、保育者、保護者、利点弱点、関係構築

## 1. はじめに

少子化や共働き世帯の増加といった社会の変化に伴い、現在の保育施設には子どもの生活を支えるだけでなく、家庭や地域とのつながりを担う役割が求められるようになった。保護者の生活様式や価値観が多様化する中で、保育者と保護者の間に信頼関係を築き、子育てを協働していくためには、情報伝達の方法を柔軟に選択し、状況に応じて活用することが求められている。

近年ではICTの活用などによるコミュニケーションツールも多様化してきた。このような社会の変化に伴い施設の在り方にも変化が生じているように見受けられる。それは保育者同士や保育者と保護者、園と地域の連携や協働にも現れている。

具体的な変化として、保育者の他者への伝達方法について時代と共に様々なツールが存在し用いられるようになった。保育現場における伝達手段として、従来から存在し用いられている対面による口頭での伝達、より明確で確実な伝達を可能とする紙面による伝達、そして近年新たなコミュニケーションツールとして台頭してきたICTによる伝達などが挙げられる。

このような状況において、保育者と保護者との間にどのような関係が生じているかを明らかにし、どのように関係を構築していくかということを認識することが必要ではないか。保育者による保護者への保育の伝達の目的と方法を把握し、可視化することで、今後の施設保育及び地域を含めた家庭との関係性構築を進めていくことが必要である。

本研究では、伝達の種類や効果について調査し、現在の保育者からの発信方法の実態を把握し、保育の伝達方法の利点と弱点を明らかにすることを目指している。その結果よりよい伝達方法を見出すことができれば、保育者と保護者の良好な関係の構築、ひいては子どもへの好影響に貢献することになる。

## 2. 先行研究

これまでの研究において、保護者支援については多くの研究が存在する。保育者と保護者の協働に関する研究や、保育者からの情報発信やその情報について保護者による受け取り方に関するもの、保育者と保護者とのコミュニケーションについて論じたものの、連絡帳やドキュメンテーションといった発信方法について考察したもの、保育施設におけるICT活用の有効性についての研究など、様々な視点から研究されている。

保育者と保護者との関係づくりについては、保育者主体の発信から保護者主体の取組への見直しが必要であり（大村、加藤、武石 2023）、保育者と保護者では捉え方が異なるため、保育者は保護者の満足が高くなるような保護者主体の支援に力をいれるべきという指摘がある。これは保育者と保護者との良好な関係を構築する上で必要な視点になると思われる。

保育者と保護者とのコミュニケーションについて丸目（2014）によると、保護者支援の前提に保育者と保護者との間に信頼関係が作られることが必要であり、そのためにコミュニケーションの充実が求められると説いている。コミュニケーションが十分でない要因として、保育者側の勤務状況と保護者側の生活状況がある。両者の関わりりの時間的制限、一方向の情報発信が挙げられ、このような問題を解決するために業務改善が提案されている。一方でコミュニケーション構築が出来ている実践も見られ、業務改革と共に保育士一人一人の意識改革も必要であるとする。日常の取組とは別に、クラス編成時のような子どもの生活に大きな変化があるとき、連絡帳廃止といった「コミュニケーション体制の変化」がある場合など保護者の不安や戸惑いが高まるときに育児支援、保護者支援のニーズが高まることとあった、時宜を捉えた意識的なアプローチが必要であることが示されている。

具体的な連絡ツールの活用について、前田、浅井（2022）は、ドキュメンテーションの活用について述べている。ドキュメンテーションに対する保育者の意図と保護者の受け止めには差があるが、文字と画像を用いたドキュメンテーションでは保護者の保育に対するイメージ化が促進され、情報伝達のみならず、家庭での育児への参考につながりやすいことが示された。同時に保育者と保護者の共有の手段としても有効であることが示された。

連絡帳を介した子育て支援について江畑（2023）は、保護者の連絡帳記述の分析から、保護者の望む保育について考察している。分析の結果、連絡帳により保護者の気持ちが明示され、時間経過により保護者の育児に対する不安の低減と自信の増加、保育者との信頼関係が深化している過程が明らかにされている。また連絡帳を「情報交換ツール」と「子育て支援のツール」として捉え、それぞれの機能の変容について示している。課題としてデータの普遍性や連絡帳を利用することによる限界が挙げられている。それは文字での伝達や言語の違いによる意思疎通の齟齬といったものである。

また伊藤（2016）は乳児の保護者に対する「食事の連絡帳」を用いた保護者との連携において、情報伝達から子育て支援へと連絡帳の機能の変化を指摘している。

一方で、張（2016）による保育者と保護者のコミュニケーションにおける誤解に関する研究では、発生した誤解事例を収集し分析しており、誤解の発生要因を6つに分類している。誤解発生要因の上位にコミュニケーションの媒体が挙がっている。そこで最も多かったのは連絡帳による誤解である。保育者の言葉の選び方、表現の方法によっては、保護者との信頼関係を構築するはずの連絡帳が誤解につながることもあることが明らかとなった。

ICT活用については、水津、吉田（2024）による連絡帳やポートフォリオを紙媒体と電子媒体で比較し、利用状況や意識変化、そして紙媒体のメリット及びデメリット、家庭での子育ての変化について明らかにされている。

保育現場へのICT導入については、三井（2021）、中津（2020）によって、主に保育者の事務省力化や軽減によって子どもとの関わりや保育について考える時間の確保など、本来の保育に注力できるというものである。また、小泉（2019）は、スマートデバイスを利用する保育者及び保護者に対しICT活用に対する意識の経年変化を測定し、ICT活用の効果を検証している。結果は保育者と保護者では意識格差があり、利用に対する有用性は保育者より保護者の効果が高いという結果となった。保護者の有用性が高かったICTを利用して保護者支援、子育てにおける協働を進める必要性が示された。

### 3. 本研究の目的と内容

以上見てきたように、保育者と保護者の連携協働においては様々な知見が生み出されており、保育内容の伝達も多岐に渡っていることが明らかになっている。連絡帳、おたより、ドキュメンテーション、等に加え、ICTのような新しい連絡手段、コミュニケーション方法が登場し、社会での利用が広がっていくと、保育においても活用の機会が生まれ、他の方法と相まって活用状況も変化している。また、紙媒体なのか電子媒体なのかという伝達の種類との組み合わせも生まれている。このように、現在は保育者と保護者の連携協働をどのように進めていくか、どのような媒体を選択していくかの過渡期にあり、まさに新しい状況が生じているといえる。その実態はどのようなものか明らかにすることはよりよい子育て支援の構築に資するものと考えられる。

これらのことから先行研究において伝達方法についてそれぞれ焦点を絞った研究はおこなわれているが、現在の多くの保育現場で行われている、子育て支援を実施するための保護者との会話、対話の方法についての検討は不十分である。本研究では、その伝達方法について「1. 対面による伝達 2. 紙媒体による伝達 3. ICT活用による伝達」の3種類に分類し、それぞれの伝達方法の利点と弱点を明らかにし、今後のよりよい伝達方法について探ることを目的として、実際の保育現場においてどのような実態があるのか検証していく。

### 4. 研究の方法

研究の方法として以下の手順により実施した。

- ・調査期間 令和7年6月下旬から7月上旬に実施
- ・対象施設 ①保育総合研究会会員園の100施設  
②調査回答園から地域ごと無作為に4園選出し、ズームによるインタビューを実施
- ・回答方法 グーグルフォームを用いたウェブ及び質問用紙を送付
- ・分析方法 調査回答項目毎に集計し、回答の傾向を読み取る。
- ・倫理的配慮 調査協力者に対し、アンケート調査の一部またはすべてに回答しなくても不利益を受けることがないこと、アンケート調査は記名の必要はなく、個人が特定されないことを確認し、回答をもって本調査に同意することを書面で説明した。
- ・質問項目 質問の構成は図1のとおり

### 5. 調査結果

#### （1）回答数について（表1）

回答は34施設44人より得た。回収率は77%であった。回答者の内訳は園長、副園長及び副園長、教頭が46%で主幹保育教諭及び主任保育士が38%、クラス担任が11%、副主幹保育教諭やサブコーディネーター、援助職員といった職種であった。

#### （2）伝達方法について

連絡帳、おたより、園内掲示用文書、ドキュメンテーション、その他の5つの伝達方法に分類し、伝

| 質問項目                        | 選択肢等                 |                 |            |            |       |  |
|-----------------------------|----------------------|-----------------|------------|------------|-------|--|
| 1. 回答者情報                    |                      |                 |            |            |       |  |
| 施設名                         |                      |                 |            |            |       |  |
| 回答者情報（役職名）                  |                      |                 |            |            |       |  |
| クラス担任の場合クラスの年齢              |                      |                 |            |            |       |  |
| 2. 伝達方法                     | 連絡帳                  | おたより            | 園内掲示文書     | ドキュメンテーション | その他   |  |
| 伝達の内容について（複数回答可）            | 子どもに関すること            | 園行事に関すること       | 保育に関すること   | 地域に関すること   | その他   |  |
| 伝達手段について                    | 口頭                   | 紙               | ICT        | その他        |       |  |
| 口頭での伝達の頻度                   | 日                    | 週               | 月          | 年          |       |  |
| 紙での伝達の頻度                    | 日                    | 週               | 月          | 年          |       |  |
| ICTでの伝達の頻度                  | 日                    | 週               | 月          | 年          |       |  |
| その他                         | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |
| 3. 伝達目的と意図、伝達手段の選択理由（複数回答可） | 子どもの姿を知らせたい          | 保育者の思いを伝えたい     | 園の取組を知らせたい | その他        |       |  |
| 4. 保護者の変化                   |                      |                 |            |            |       |  |
| 伝達内容が保護者に通じるまでの回数           | 1回で伝わる               | はじめの伝達とは別に確認が必要 | その他        |            |       |  |
| 初回の伝達とは別に確認が必要な場合の回数        | 1～2回                 | 3～5回            | 6回以上       |            |       |  |
| 伝わりにくい場合の工夫                 | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |
| 1回の伝達で盛り込む内容                | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |
| 5. 保護者との伝達に関しての工夫           | 保護者からのフィードバックができる仕組み | 文言や写真の選び方       | 図表等を使用     | その他        |       |  |
| 6. 伝達を通じてこどもの育ちへの影響         | すごく感じる               | ある程度感じる         | 少し感じる      | 感じない       | わからない |  |
| 7. 伝達の実践を通して、利点と弱点          | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |
| 8. 今後改善について                 | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |
| 9. その他                      | 自由記述                 |                 |            |            |       |  |

図1 質問の構成

表1 回答者の職種

| 職種                   | 実数 | 割合  |
|----------------------|----|-----|
| 園長                   | 13 | 30% |
| 副園長・教頭               | 7  | 16% |
| 主幹保育教諭               | 16 | 36% |
| 主任保育士                | 1  | 2%  |
| 副主幹保育教諭              | 1  | 2%  |
| サブコーディネーター、援助児担当、フリー | 1  | 2%  |
| クラス担任                | 5  | 11% |
| 合計                   | 44 |     |

表2 伝達内容の選択傾向

| 伝達内容       | 子ども | 園行事 | 保育内容 | 地域 | その他 | 計   |
|------------|-----|-----|------|----|-----|-----|
| 連絡帳        | 35  | 20  | 29   | 3  | 8   | 95  |
| おたより       | 34  | 40  | 39   | 17 | 8   | 138 |
| 園内掲示文書     | 26  | 33  | 32   | 19 | 3   | 113 |
| ドキュメンテーション | 32  | 25  | 30   | 6  | 0   | 93  |
| その他        | 10  | 4   | 6    | 2  | 5   | 27  |
| 計          | 137 | 122 | 136  | 47 | 24  | 371 |

達内容（子どもに関すること、園行事、保育内容、その他）、伝達手段（口頭、紙、ICT）、伝達頻度について回答を求めた。

#### ①伝達の内容

##### ①-i 内容の選択傾向（表2）

まず伝達方法と伝達内容に関する設問では、連絡帳は「子どもに関すること」が36.9%を占め、次いで「保育内容に関すること」（36.6%）、「園行事関すること」（32.8%）と続いている。以下おたよりは園行事、保育内容、子ども、園内掲示文書は園行事、保育内容、子ども。ドキュメンテーションは子ども、保育内容、園行事、その他は子ども、保育内容、園行事の順となった。

##### ①-ii 選択内容について（表3）

また、どの伝達方法においても2つ以上の伝達内容が選択されている。連絡帳及びドキュメンテーションにおいては2～3つ、おたより及び園内掲示文書においては3～4つの内容が選択されている。

伝達内容については「子ども」、「園行事」及び「保育内容」の3つとも伝達内容として取り上げられる傾向にあり、次いで子どもと保育内容、保育内容と園行事を伝達内容として選択されている。

##### ②伝達の方法における伝達手段の選択傾向（表4）

伝達の方法については、表4をみると、連絡帳が紙、口頭、ICT、の順で選択されており、おたよりについてはICT、紙、口頭、園内掲示文書では紙、

表3 伝達方法における伝達内容の組合せ

| 伝達内容       | 1つのみ | 2つ | 3つ | 4つ | 5つ | 計   |
|------------|------|----|----|----|----|-----|
| 連絡帳        | 6    | 9  | 15 | 5  | 0  | 35  |
| おたより       | 0    | 7  | 15 | 16 | 3  | 41  |
| 園内掲示文書     | 2    | 7  | 12 | 14 | 1  | 36  |
| ドキュメンテーション | 4    | 9  | 17 | 5  | 0  | 35  |
| その他        | 10   | 3  | 1  | 2  | 0  | 16  |
| 計          | 22   | 35 | 60 | 42 | 4  | 128 |

表4 伝達方法における伝達手段の選択傾向

| 伝達内容       | 口頭 | 紙   | ICT | 計   |
|------------|----|-----|-----|-----|
| 連絡帳        | 26 | 28  | 24  | 78  |
| おたより       | 11 | 27  | 34  | 72  |
| 園内掲示文書     | 10 | 32  | 16  | 58  |
| ドキュメンテーション | 11 | 22  | 23  | 56  |
| その他        | 5  | 3   | 10  | 18  |
| 計          | 63 | 112 | 107 | 282 |

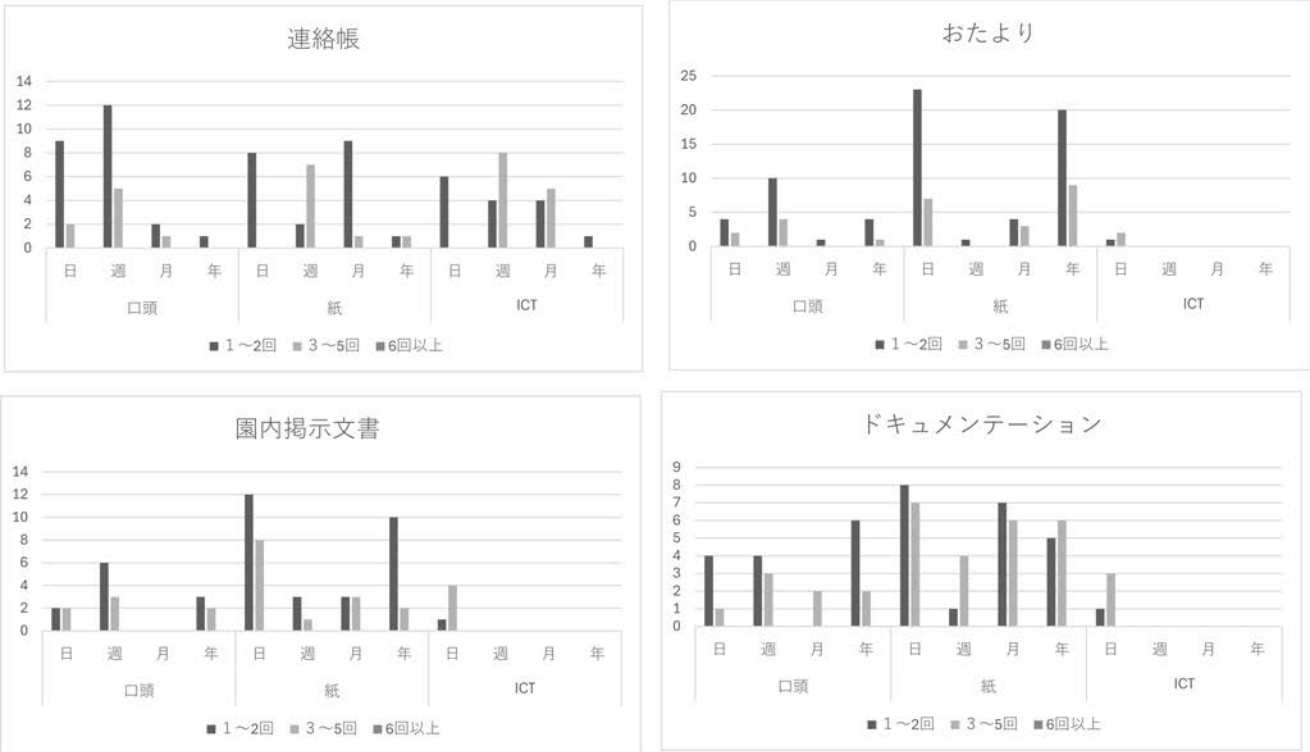


図2 伝達の頻度

ICT、口頭。ドキュメンテーションではICT、紙、口頭、その他ではICT、口頭、紙の順で選択されている。

伝達手段においては、紙のみの伝達が39.7%であり、ICTと紙の組合せ、口頭は他の手段と共に用いられる結果となった。

③伝達の頻度

図2のグラフをみると、連絡帳においては、どの

伝達手段においてもほぼ週一回は伝達を実施している。また、おたよりでは口頭が週1～2回の頻度で実施しており、紙では日に1～2回の頻度で実施されている。園内掲示文書では口頭での伝達が週1～2回、紙での伝達が日に1～2回、ICTでは一日に複数回の実施がある。ドキュメンテーションについては、紙による伝達が1日あたり1～5回の実施がみられた。

表5 伝達手段の組合せ 口頭、紙、ICT、その他

| 伝達内容       | 1つのみ | 2つ | 3つ | 計   |
|------------|------|----|----|-----|
| 連絡帳        | 6    | 15 | 14 | 35  |
| おたより       | 17   | 17 | 7  | 41  |
| 園内掲示文書     | 18   | 14 | 4  | 36  |
| ドキュメンテーション | 18   | 13 | 4  | 35  |
| その他        | 12   | 3  | 0  | 15  |
| 計          | 71   | 62 | 29 | 162 |

表6 保護者への確認頻度 (%)

|      |      |
|------|------|
| 1～2回 | 76.7 |
| 3～5回 | 14.0 |
| 6回以上 | 2.3  |
| その他  | 7.0  |
| 計    | 100  |

表7 伝達に関しての工夫

|   |                                |
|---|--------------------------------|
| ① | 保護者からのフィードバックができる仕組みがある        |
| ② | 伝える内容が分かりやすいよう文言や写真の選び方を工夫している |
| ③ | 伝える内容が分かりやすいよう図表等を使っている        |
| ④ | その他の工夫                         |

| 記載内容 | ○1つ | ○2つ | ○3つ | ○4つ |
|------|-----|-----|-----|-----|
|      | 21  | 14  | 7   | 0   |

表8 子どもへの影響を感じるか (%)

|         |      |
|---------|------|
| すごく感じる  | 17.1 |
| ある程度感じる | 58.5 |
| 少し感じる   | 14.6 |
| 感じない    | 0.0  |
| わからない   | 9.8  |
| 計       | 100  |

### (3) 伝達目的と意図、伝達手段の選択理由 (表5)

伝達目的と意図、伝達手段の選択理由については、以下の結果が得られた。

伝達の目的を「こどもの姿」「園の取組」「保育者の思い」「その他」の中から複数回答を求めたところ、その他を除く項目がすべての園で盛り込まれていた。またどれか1つではなく2つの組合せが4園、3つを伝達目的として取り入れている回答は37件 (84%) に上った。

### (4) 伝達内容における保護者への確認頻度 (表6)

保護者への伝達について、一度の伝達で齟齬なく伝わることは少なく、約93%が伝え直しが必要という回答を得た。50～70%の保護者には1度の伝達で伝わり、伝わりにくい保護者が一定数存在している現状が伺われる。伝え直しの頻度は、76%が1～2回が必要と最も多く、確認のための伝達を複数回実施することもあるとの結果となった。

### (5) 保護者への伝達に関して、工夫していること (表7)

1回の伝達に盛り込む内容については、「必要な分を必要なだけ」盛り込む場合、できるだけ必要最小限に留める、伝えたい内容によって伝達手段を変える、といった回答があった。

また、「保護者からのフィードバックができる仕組みがある」「わかりやすいよう文言や写真の選び方を工夫している」「わかりやすいよう図表を使っている」「その他の工夫」の4つから複数回答により

選択し、以下のような回答を得ることができた。

選択の結果としては、伝達の工夫については、「伝える内容がわかりやすいよう文言や写真の選び方を工夫している」が最も多く、半分程度の園において「保護者からのフィードバックができる仕組みがある」「伝える内容がわかりやすいよう図表等を使っている」選択されている。

どれか1つだけの取組は16園で表中の②のみの選択が37.2%であり、複数の選択の組合せでは、①②、②③の組合せがそれぞれ7園 (16.2%)、①②③が6園 (13.9%) となっている。

具体的な工夫については、一斉配信や個別対応を行うことや伝達手段の組合せによる説明の機会を設けることといった、より細やかな配慮に基づいて伝達を試みていることが挙げられる。

また、自由回答による伝達手段や伝達内容に関する工夫については、以下のような回答が得られた。ICTについて、口頭、紙媒体など、他の手段による補足が必要となることがある。一斉に送り既読によって見てくれた確認は取れるものの、しっかりと覚えておらず口頭で再度確認が必要といったことや、ICTの補足的利用として紙を張り出し (園内掲示文書)、写真を撮ってもらい確認してもらうこともある。

### (6) 子どもの育ちへの影響 (表8)

保護者への伝達 (やり取り、コミュニケーション) を通した、子どもの育ちへの影響については、回答全体の90%が保護者への伝達ひいてはコミュ

ニケーションが子どもの成長に影響があると感じている結果となった。

## （7）伝達における利点と弱点

### ①利点について

#### ①-i 伝達そのものについての利点

伝達の実践について、利点と弱点について、以下のような回答を得た。

保護者への伝達を行うことの利点としては、保育の状況や園の取り組みを伝える機会が多くなったことで、園の保護者のみならず地域にも情報を発信できるようになった、保護者が写真を見ることにより子どもの姿を伝えやすい、保育園の子どもの様子がわかる、すぐ準備してもらえる、といったことが挙げられている。また、子どものことに関して、思いを共有することに、伝えることの重要性を感じていること、保護者に伝えることによって、子どもの姿が変化していくことを感じるとの記載が見られた。様々なツールを活用して情報を伝達できることは、大きな利点である、といった意見が述べられている。

#### ①-ii 保護者とのやりとりに関する利点

連絡帳には、保護者の方が書いてくださるコメントから文字を通して思いが伝わる良さがある。お子さんの成長を共に喜び合ったり、悩みを共有したりする大切な機会となっている。

ドキュメンテーションの利用では、家庭とは違う園での様子を写真で知らせることで、子どもたちの様子をよりわかりやすく伝えることができる点がメリットとして挙げられている。

口頭（直接話す）場合の利点として、表情などを読み取り理解できるように相手によって話し方を変えることができること、子どもの困り感だけでなく、保護者の困り感にも気づけること、子どもへの理解や園の思いの理解へ繋がったことが挙げられている。

ICTの活用で、読んでくれる保護者は保育や子どものことに興味を持ってくれ利点を感じている。保護者がいつでも園からの伝達を確認できる。

ICTアプリケーションを利用することで、保護者からのフィードバックをさらに返すことができる。また、紙の配布時よりも見落としが減ったように感じるとの回答を得た。

#### ①-iii 職員負担の軽減や業務省力化につながる利点

ICTの活用で、配布にかかる時間が縮小された。既読チェックがあるので、伝え直し必要者が把握しやすい。

職員によるノートへの記述を減らすことができた。

ICT化の推進により、紙の使用を減らすことで経費削減や業務の効率化にもつながっています。

ICT（ネット）による公開は見学・入園希望にはかなりの効果がある、との意見がみられた。

#### ①-iv 意識向上に関する利点

園の取組を発信でき、少しずつ保護者の理解へとつながっていていると感じる、といった回答や、保護者が興味ある内容であれば、保護者も気にして聞いてくれるとの回答が見られた。

### ②弱点について

一方、伝達における弱点については伝達手段に関する意見が多く見られた。

#### ②-i 口頭に関する弱点

口頭だけだと、聞いた内容を聞きのがしてしまう保護者の場合があり、伝えた内容と誤解が生じることもあるといったものや、直接話す以外で伝達する場合は、相手にどの程度伝わっているのかの把握が難しく、特に文章だと受け取り方の違いがあるとの意見があった。

#### ②-ii 紙に関する弱点

色々な背景の保護者がいるので、同じ方法でも伝わりにくい場合があるという前提のもと、個人情報など気をつける配慮が必要である、言っても反応がないとき、繰り返し伝える必要を感じている。また、文字だと受け取り方に相違があったり、伝えたい内容が伝わらずトラブルになる危険性もある。また文書での連絡を見ていない保護者の存在も紙による伝達による弱点として捉えられている。

#### ②-iii ICTに関する弱点

ICTによる伝達に関しては、到達がチェックされたかどうかの機能について、連絡しても読まない保護者については把握ができないという弱点がある。また、感応性の低い保護者、は媒体を変えても伝わらず、意図が伝わらない人もいる。ICT化すると保護者の反応が分かりづらいといった状況も生じるようである。

またメールによる配信について、確認はしたが、しっかりと覚えていないこともあり、口頭で再度確

認となること、配信での伝達が一方通行のお知らせになり、保護者からのフィードバックが少なくなったという意見も見られた。多言語に対応できておらず伝わらない、といった弱点が指摘されている。

#### ②ーiv 伝達手段に共通した弱点

紙ベース、口頭、ICTに限らず、園として伝えているつもりでも、伝わらないことがあるといった意見や、子どもへの理解や園の思いの理解を汲み取って欲しい保護者にはなかなか伝わりづらいとの回答があった。一方で、きちんと見て貰えているか分からないところがある為、その都度声をかける必要のある保護者が存在することや、伝達手段の変更による伝わりにさがあるとの回答もあった。

#### ③運用上の工夫についての弱点

保育者や職員の運用における弱点についても挙げられている。すなわち、園内におけるチェックなど、出すまでの確認が必要になること、写真を用いる場合、職員により写真の撮り方や着眼点の差が出る、といったことである。また、保護者が興味ある内容であれば、保護者も気にして聞いてくれるが、そうでない時は、聞いているのか不明な場合がある。

写真や文言を書く、印刷といった時間が生じることが挙げられている。

### (8) 今後の改善等取組について

職員のスキル・技術の向上に関すること。

#### ①保育者の技術・スキルの改善

保育者が一度で理解できるような文章改善、情報伝達の仕組みづくりが必要であること、帳面類の簡素化や配信方法の工夫に加え、4コマ漫画など視覚的資料を活用することで、より迅速かつ正確な伝達を実現できる可能性を指摘されている。また、ICTと紙など複数の方法を取ることで、保護者に短時間で同じ内容を伝えることができること、保育者のスキルや日々の関係づくりによって伝達の質は変わるため、ICTを積極的に活用し、保育の質の安定化を図る必要を感じている回答があった。

#### ②保護者の状況に合わせた伝達

色々な伝達手段を用いながら、それぞれの保護者に合わせた伝達手段で共有理解につながるようにしていく。一つの方法に限定せず、保護者の理解しやすさに応じて複数の方法を併用することが重要である。それぞれの保護者に合った伝達手段を選択し、

共有理解する努力が求められる。

#### ③保護者、職員間、地域住民など、人との関わりに関すること

ICTの利便性を活かしつつも、直接対話が希薄にならないよう配慮する必要がある。SNSでは園の考え方や取り組みを積極的に発信し、保護者だけでなく地域住民にも関心を持ってもらえるよう取り組む。

保育に関わる全ての者が共通理解をもつこと、職員間の伝達を効率化し、確実な情報共有を実現することが求められる。

#### ④新たな方法の確立、移行に関すること

他園の取り組みを参考にしつつ、子どもたちの日常生活や遊びの中でもICTを活用したい。少しずつICTによる伝達方法へ移行しながら、内容の質や双方向性を高める。また、業務負担軽減のため、連絡帳のICT化を検討している。

#### ⑤伝え方の工夫に関すること

伝わりにくい保護者への対応には、内容や配信タイミングの工夫が必要である。園行事や持ち物のお知らせにアプリを用いる際は、通知のタイミング調整や理解を確認できる仕組みを整えていく。また、災害時の伝達手段の確立や、保護者からのフィードバックを受け取る仕組み作りも重要である。締切期日の遵守を促すため、資料や写真を用いた説明も有効である。

#### ⑥現状維持または機能拡充について

保育にかかわる全ての書類のICT化を進めるとともに、ドキュメンテーションの充実を図りたいとの意見があった。

## 6. 分析・考察

### (1) 保育者からの発信方法の実態

発信される伝達内容については、「子どもに関すること」「保育内容」が多い。そして伝達手段としては、紙及びICTが多く選択されている。また複数の内容を適宜発信していることが明らかとなった。一方伝達手段については、どれか1つに絞りつつも、複数の手段を用いて伝達していることも伺える。その理由として、伝えるべき保護者の状況によって、情報の未達つまりは伝えたい内容が相手に伝わっていないことや本来伝えたい内容が忘れ去られてしまうという忘却、また伝達したい内容につい

表9 3つの視点から見た利点・弱点の傾向

|     | 利点                          | 弱点            |
|-----|-----------------------------|---------------|
| 効率性 | 業務省力 時間短縮 即応 同時同質同一<br>経費削減 | 確認作業増加        |
| 容易性 | 情報到達 発信・受信                  | 認識の差（優先順位、関心） |
| 正確性 | 理解一致 反応共有                   | 理解の差（齟齬） 誤解   |

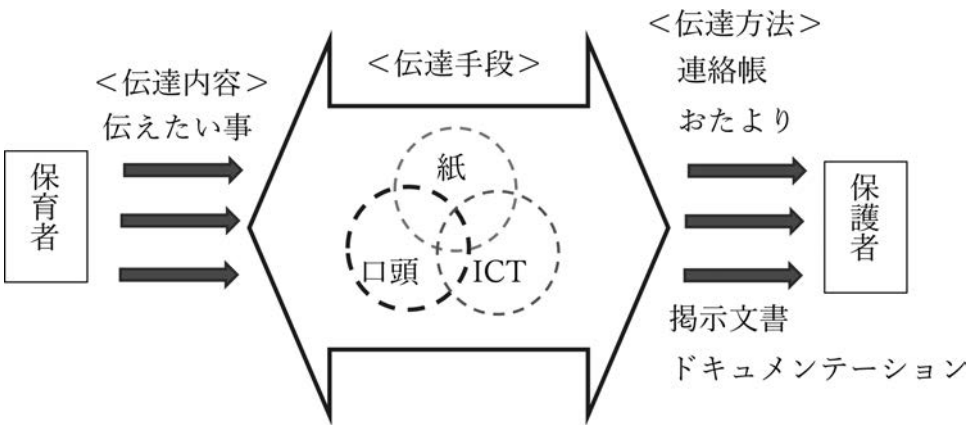


図3 保育者から保護者へ向けた伝達イメージ

てうまく伝わらず理解不足になるといった状況への配慮として、複数の伝達手段を組合せ、確実な情報伝達と内容理解を促しているためだと考えることができる。口頭、紙、ICTそれぞれの活用を進める一方、弱点に対する補足的な利用により、どれか1つに限定した仕様ではなく、複合した利用が見受けられるのである。

連絡帳やおたより、ドキュメンテーションといった伝達方法の利用については、伝える相手である保護者との関係性や保護者の個性によって使い分けをしたり補足したりしている。また、伝達手段の選択は、情報の内容、保護者の状況、業務効率に影響を受けている。

伝達に関する不具合の要因について、伝達手段の持つ利点や弱点といったものも関わっていると考えられる。

（2）保育の伝達方法の強みと弱みを明らかにすること

伝達手段および伝達方法における利点と弱点について、回答内容から伝達における利点・弱点の傾向を、「効率性」「容易性」「正確性」の3の視点から分類すると表9のように整理できる。

表から見てきた内容は、業務省力、時間短縮、

すぐに対応できる（即応）、保護者に対して同じ時間で、同じものを、一つの文書なり様式で伝えることが出来る（同時・同質・同一）や経費削減といった効率性の利点に対して確認作業増加の弱点が見えてきた。合わせて容易性の側面からは、情報の到達や発信・受信について容易になる一方で保護者にとっての当該情報の優先順位や関心について認識の差が現れることが弱点として認識されている。また、正確性においては保護者の理解の一致が促進されること、保護者の反応が共有できることが利点としてあり、情報の伝わりにくさに弱点がみられる。発信者である保育者にとって、これら利点と弱点を制御し、より利点を伸ばし弱点を補うといった工夫がそれぞれ施されている。

（3）よりよい伝達方法を探る

現場においては、それぞれのツールを使いこなす知識技術を習得するために、試行錯誤と改善を繰り返していることが伺える。

その一方で、コミュニケーション力の向上も必要な能力であると認識されており、単なる情報伝達に終わらず、人間関係を構築し、信頼関係を結ぶことに注力している。

また保育者と保護者の伝達を通した関係について

は、両者をつなぐ伝達手段・方法は保育者のスキル・技術と保護者の受入体制に影響を受ける。このような関係を通じて両者の相互作用が促され、関係構築が進んでいくものと捉えることができる。

保育者の伝えたいこと（伝達内容）を、伝達手段を駆使し、様々な伝達方法によって保護者に伝えるという実態が明らかになった。伝達手段は一樣とは限らず、あらゆる形態が用いられる。そして保護者の状況に応じて組合せ、必要ならば繰り返し実施される。

## 7. まとめ

技術の進歩により社会に変化が生じれば、伝達も変化する。伝達手段が多様化することで、それに対応するために我々は対応することになる。新しい手段、新しい方法が生まれると、その利点を取り入れるべく試行する。それまでの手段や方法はなくなってしまうわけではなく、伝達はより円滑に、容易に、正確に実施できるための選択肢として残り続ける。

今回の研究では、伝達における実態について、伝達内容、伝達手段及び伝達方法から明らかにした。しかしすべてを詳細に描くまでには至っていない。今後の課題とする。

ICTの技術は今後も発展していく見込みである。伝達手段や方法にも変化をもたらすことが予想される。そのような状況において、保育者と保護者との連携や協働にどのような影響が生じるかは予断できないが、本研究で明らかになった保育者の対応力が発揮されることとなるだろう。どのような状況が生まれ、変化がもたらされるかを注視していく必要がある。合わせて社会が変化していく中で保育者自身の対応能力、つまり人間力はICTの技術の発展と共に保育者の人間力も深めていく必要がある。

## 引用文献・参考文献

- 1) 大村壮 加藤寿子 竹石聖子「保育における保護者との関係づくりと保育者の業務負担ー保育者主体の保護者支援から保護者主体の保護者支援ー」『保育・幼児教育研究年報』1号 p.10
- 2) 丸目満弓「保護者支援の前提となる保育士と保護者間コミュニケーションに関する現状と課題ー保護者アンケートを中心としてー」『大赤総合保育大学紀要』第9号 2014 pp.190-192
- 3) 前田和代 浅井拓久也(2016)「保育におけるドキュメンテーション活用に関する一考察（2）ードキュメンテーションに関する保育者と保護者の評価の比較分析に基づいてー」『東京家政大学研究紀要』第54集（1）2016年 pp.47-48
- 4) 張貞京・真下知子(2016)「保護者ー保育者間のコミュニケーションにおける誤解事例の収集」『京都文教短期大学研究紀要』第59集 2016年 pp.50-54
- 5) 伊藤優(2017)「乳児に対する保育士と保護者の連絡帳を用いた連携の様相ー「食事の連絡帳」のやりとりの分析からー」『保育学研究』第55巻3号 2017年 p33-45
- 6) 水津幸恵 吉田明日香(2024)「保育現場とのICTを活用した情報共有における保護者の利用実態と意識ー紙媒体との比較および家庭での子育ての変化に着目してー」『三重大学教育学部研究紀要』第75巻2024年 pp.89-93
- 7) 三井真紀(2021)「保育・幼児教育におけるICT活用の可能性ー幼児理解のパラダイムシフトに向けて」『心理・教育・福祉研究』第20巻1号 2021年
- 8) 中津功一朗・玉川朝子(2022)「ICT導入の意義に着目した保育の質向上に関する研究」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第57集 2022年 pp.25-29
- 9) 小泉裕子(2019)「保育現場におけるICT化の有効性についてースマートデバイスを活用した保育園における導入効果ー」『鎌倉女子大学紀要』第26巻 2019年 pp. 6 - 8